

## 王将・坂田三吉と将棋の歴史

横浜歴史研究会

会員 榎 良生

### 1. 三吉の生まれた街・堺

大阪府堺市は古代より、海の玄関口として繁栄してきた。2019年に世界遺産に登録された「堺・百舌鳥古墳群」には日本最大の仁徳天皇陵古墳をはじめ巨大古墳が点在する。仁徳天皇陵は墳丘長486m、周囲2.85km、クフ王ピラミッド、秦の始皇帝陵と並ぶ世界3大古墳のひとつで、築造には20年の歳月を要したと推測される。船で渡来する外国の使者からもよく見えるところに巨大古墳をつくることで、大和朝廷の力を誇示したものであったのだろう。古墳の掘削には鋤や鍬が必要で、先には鉄が使用されていた。現在でも堺では鉄加工・鍛冶技術が盛んだが、遠く古代より珍重されてきたのであろう。時代は下って室町時代になると、日明貿易が盛んになり遣明船が来航すると、貨幣や書籍などが輸入された。また、同じ頃に、種子島に鉄砲が伝わった。堺には高度な鍛冶技術の蓄積があったために、たちまち量産に成功する。日明貿易や鉄砲生産で財を成した豪商も現れた。戦国時代になって、町を守るために取り囲む環濠を掘り進めた結果、環濠都市が成立する。豪商を中心とした自治都市・堺には茶の湯、連歌など、独自の文化も花咲くことになったのである。江戸時代になると、鉄砲の需要はへったものの喫煙が流行した。たばこの葉を刻むたばこ包丁が、幕府公認の「堺極」として全国に広まって、これを機に食材ごとに様々な刃物が作られるようになり、現在でも「堺打刃物」として、料理人から大きな信頼を得ているのである。

その堺が生んだ伝説の棋士がいる。坂田三吉、その名は将棋を知らずとも『王将』で芝居や映画などで何度も上演されてきたので、日本中に知れ渡っている。彼の死の翌年に出た戯曲「王将」が大ヒットして、そのイメージが定着化していった。しかし、彼の歩んだ道をたどってゆくと、その実像は相当に違うものであることが分かってきた。今回は彼の虚像のイメージを払拭しながら、なぜ、ここまで人々に愛されたのか、そして後世の人々に何を残したのか、その実像に迫っていこうと思う。併せて、庶民に親しまれた将棋の歴史についても触れていきたい。

### 2. 孤高の人、坂田三吉

環濠に囲まれた堺市中心街からは少し外れるが、坂田三吉は明治3年(1870)6月3日、堺県大鳥郡船松村(現在の堺市堺区協和町)に、坂田卯之吉・クニの長男として生まれた。8人兄弟の3番目で、男は三吉ひとり、あとはすべて女ばかりの中で育った。三吉の両親は下駄の表を作ることを生業としていたようだ。家は貧しく、尋常小学校へ入学したものの、半年ほどでやめてしまったという。そのため、読み書きは苦手で後に教えを受けた升田幸三によると、覚えた漢字は「三」「吉」「馬」の3つだったという。当時の大人の遊びは縁台将棋だった。大人に混じって将棋を指すうちに、

次第に強くなっていった。三吉 16 歳の時、父卯之吉が死んで草履職人として一家を支えることになったが、賭け将棋で賞金を稼いでいたようだ。明治 24 年(1891)ごろ、堺の料亭・一力で生涯のライバルとなる関根金次郎<sup>せきねきんじろう</sup>と対戦し惨敗、これでプロ棋士を目指すことになったとされる。伴侶となったコユウ(映画や芝居では小春)に「わたしは本物の将棋指しになる。お前たちに苦勞をかけることになるから、今のうちに離縁してくれ」と言い放つが、そんな亭主でも励ました。のちに、三吉が目を患った時に、柳谷観音にお百度を踏み水垢離までしたのであった。これがもとでコユウは病になり、昭和 2 年 47 歳で亡くなったのである。最後の言葉は「あんたは将棋が命や。どんなことがあっても、あほな将棋は指しなはんや」であったという。

コユウの死より前、大正 10 年(1921)小野五平十二世名人が亡くなって、ライバル関根が十三世名人になった。当時の名人位は世襲制であったものの、品格や器量、そして棋界における実力も求められていた。関根は品格や器量は申し分なかったが、実力はすでに盛りを過ぎた 54 歳になっていた。当初、三吉は関根の襲名には異論はなかったが、そこへ八段昇格問題(当時は八段が最高位)や東京・大阪の棋界の対立も絡んで、関西の政財界に押されて、大正 14 年、(自称)名人を名乗ることになってしまった。東京将棋連盟は坂田を糾弾し、以後十数年棋界から追放されたのである。

三吉が棋界に復帰したのは、昭和 12 年 2 月、無段となって、当時最強の木村義雄八段と南禅寺で対局し敗れている。木村は脂ののった 33 歳、一方の三吉は 68 歳になっていた。翌年、木村は十四世名人になって、これ以降は実力名人制に移行したのである。この年、第二期名人戦リーグに無段で参加、なんと有力棋士を相手に 15 戦して、7 勝 8 敗と 70 歳を前にしてほぼ互角に戦ったのであった。これを最後に将棋ファンの前に姿を現すことはなかった。昭和 20 年 3 月 13 日、大阪の街は大空襲によって壊滅した。浪速のシンボル通天閣は鉄の供出により解体されて、すでにその姿を消していた。「いつになったら将棋させるんやろうなあ」、長男義雄の戦死も三吉の死期を早めることになった。終戦の翌年、昭和 21 年 7 月 23 日、3 人の娘に見守られて波乱の生涯を閉じたのである。9 年後の昭和 30 年 10 月、日本将棋連盟は三吉にその功績を讃えて名人・王将位を贈ったのであった。

三吉は新聞の将棋講評で、自らの名手についても詳しく解説したという。敵方を利することになるのでは、との周囲の忠告に対しての三吉の言葉は次のとおりである。

咲かせた花は採るにまかせて、また実生<sup>みしょう</sup>から育てるばかりなり  
三吉とコユウ(小春)は村田英雄さんの『王将』の♪吹けば飛ぶような将棋の駒に・・・のイメージが強い。実際の彼は、やんちゃなところはなく、礼儀正しい人だったようだ。咲かせた花は採るにまかせる気概を備えた清々<sup>すがすが</sup>しい好人物だったのであろう。

### 3. 三吉が命をかけた将棋の歩み

人類に娯楽を提供してきた将棋の歴史を辿ることにしよう。その起源は遠くインドのチャトランガに遡るとされる。サンスクリット語で4つの部分という意味で、古代インドの軍隊が、象、馬、戦車、歩兵の四体だったことに由来すると考えられている。この種のゲームがいつ誕生したのかは不明だが、おそらくは紀元前五世前後との見方がある。チャトランガが西へと伝わり、ペルシャ、アラビアを経て10世紀ごろにはヨーロッパに渡ったものと思われる。これがチェスの原型となり、今のような形態になったのは15世紀ごろだと考えられている。一方、東に伝わったものは、タイでマークルックに、さらに中国ではシャンチー（象棋）になっていった。中国の福建省泉州から出土した象棋の駒は13世紀のものと思われ、古くから親しまれていたことがわかる。日本に伝わったのはいつのころか定かではないが、奈良の興福寺で発掘された駒と、天喜6年（1058年）と書かれた木簡と一緒に発見されたことから、このころには親しまれていたものと推測される。当時の将棋は現在では平安将棋と呼ばれて、現在のものから飛車と角を除いて、持ち駒の再使用はまだ無かったものと思われている。その後、ルールは次第に整備されて、15～16世紀ごろになると「相手から奪った駒を再使用する」いわゆる「持ち駒」制度が導入されたとみられる。この形態の将棋を以前の平安将棋と区別して、今では本将棋と呼んでいる。

17世紀のはじめ、江戸幕府は将棋と囲碁の名人、大橋宗桂と加藤算砂に50石の俸禄を支給することを決め、幕府の公認となった。将棋の始祖宗桂の死後、後継にあたる、大橋家、大橋分家、伊藤家の三家が将棋の家元となって、その中で最強の者が名人と称することになっていった。明治になると、俸禄の支給はなくなり拝領屋敷も返上せざるをえず、家元制度は経済的基盤を一気に喪失した。名人位は有力棋士の推挙制に移行してゆく。庶民の間では、風呂屋などでの縁台将棋も盛んにおこなわれており、一定の人気を保っていた。明治31年（1898年）、有力棋士の小野五平が十二世名人となった。このころから、新聞に将棋欄の開設がはじまった。これにより、将棋を楽しむ機会が増えて、普及面でも大いに役立ったのである。小野が名人になった時にこれに反対したのが、坂田三吉の終生のライバル関根金次郎だった。彼は血気盛んな31歳、対する小野はすでに68歳になっていた。自分と戦って勝負で決するべきと言ったのである。この時は仲裁が入ることによって、大事には至らなかった。いずれは関根が継ぐものと世間は思っていたが、小野は91歳の長寿を全うしたため、関根が後を継いだ時にはすでに54歳になっていたのである。これが実力制名人戦制度の創設へとつながり、昭和10年3月に制度改革が行われ、関根は2年後に引退、世襲名人制度はこれをもって最後となったのである。実力名人制の第一期特別リーグ戦は木村義雄8段が優勝して新名人に就いた。昭和25年（1950年）、新たに「九段戦（後の竜王戦）」がタイトル戦になり、翌年「王将戦」が加わった。タイトル戦はこののち、「王位戦」「棋聖戦」「棋王戦」「王座戦」と拡大し、平成29年（2017年）「叡王戦」

ができて 8 つになったのである。これをめぐって升田幸三、大山康晴、中原誠、羽生善治などのスーパースターが登場して棋界を盛り上げてきたのであった。

#### 4. 蓮根の上を歩く心のように

三吉の前半生は自由奔放、破天荒で奇人変人のきらいもあったかもしれない。北条秀司の戯曲『王将』に通じるものもあったのだろう。しかし、<sup>めいじんせんしょうもんだい</sup>名人僭称問題で棋界を追放され、さらに最愛の妻コユウに先立たれてからの三吉は、老境を静かに生きる寂しい老人だった。晩年の坂田は不遇だったとよく言われるが、決してそうではなく、駒の無限の可能性を探る研究者だったようだ。<sup>よわい</sup> 齢 60 を前にした彼が大阪毎日新聞に口述筆記の形で連載した「将棋哲学」の中に次の一節がある。少々長いが引用する。

「蓮根をポキンと二つに折ると、蜘蛛の糸よりも細い糸が出る。その細い糸の上に人間が立っているとしたらどうか。立とうとしたとて立てるものではないが、確かに蓮の糸の上に立ったのだ。一切の力が抜けて身体から脱けだして駒に吸いこまれてしまうと同時に細い糸の上にも立って歩ける、というふうにならなければ本当の将棋ではない。そんなとき打つ駒に音の出るはずがない。響きのするはずがない。音をさせるのは心持ちが本物ではないからだ」

破天荒な若者時代とは全く別物の、深い人間性を垣間見る言葉である。齢 60 を超えた三吉は直接の弟子ではなかったが、少年の升田幸三に素質を見い出した。「あなたの将棋は大きな将棋や。木村（第 1 代実力制名人）を倒せるのはあんただけや」と激励されたと、升田は語った。その期待のとおり、当時 10 代の少年は棋界を背負う名棋士へと成長して行ったのである。2022 年 2 月藤井聡太 4 冠（竜王・王位・叡王・棋聖）は王将を取得して、19 歳 6 か月で 5 冠を達成した。過去に 5 冠を達成したのは、大山康晴、中原誠、羽生善治の 3 人しかおらず、19 歳というのは羽生の 22 歳を 29 年ぶりに更新したのである。将棋界は新しいスターの登場で大いに盛り上がりを見せている。彼らにもきっと将棋とその人生にかける深い心意気というものがあるに違いない。三吉の活躍もはるか昔のものになってしまったが、時代は変わっても彼のような人間的魅力に溢れた素晴らしい棋士に成長してもらいたいものである。（以上）

#### 【参考文献】

「堺観光ガイドブック」（公益社団法人 堺観光コンベンション協会発行）

「棋神・阪田三吉」（中村 浩著 小学館文庫）

「孤高の棋士 坂田三吉伝」（岡本 嗣郎著 集英社文庫）

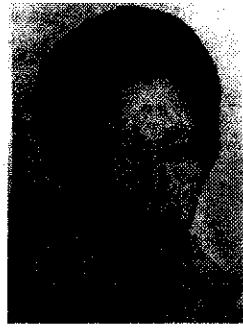
「将棋 400 年史」（野間 俊克著 マイナビ新書）

「9 四歩の謎」（岡本 嗣郎著 集英社）

この他ウイキペディア、日本将棋連盟、堺市優良観光土産品などの資料を参考にした 写真の資料はウイキペディアから主に掲載した



資料 1. 坂田三吉  
贈名人・王将



資料 2. コユウ(小春)



資料 3. 小野五平  
十二世名人



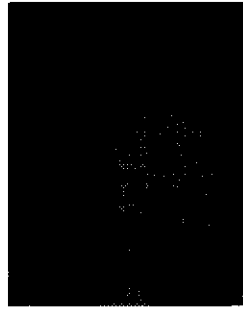
資料 4. 関根金次郎  
十三世名人



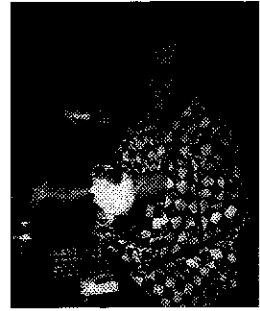
資料 5. 木村義雄  
十四世名人



資料 6. 花田長太郎  
九段



資料 7. 升田幸三  
実力制第 4 代名人



資料 8. 大山康晴  
十五世名人



資料 9. 藤内金吾  
八段



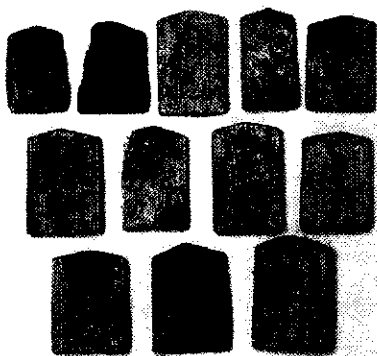
資料 10. 内藤国雄  
九段



資料 11. 北条秀司



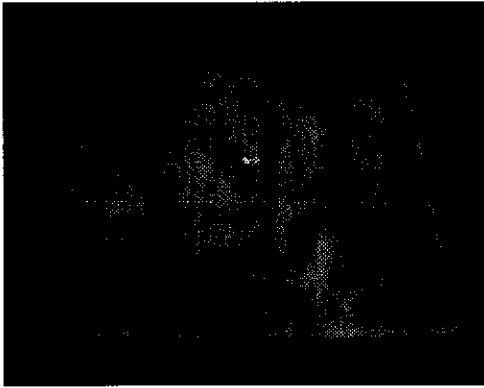
資料 12. 村田英雄



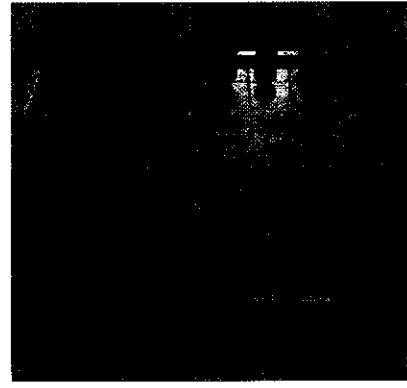
資料 13. 興福寺で発掘された駒



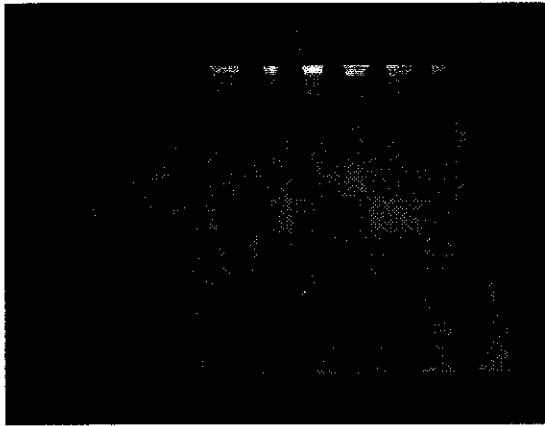
資料 14. 名人僭称問題



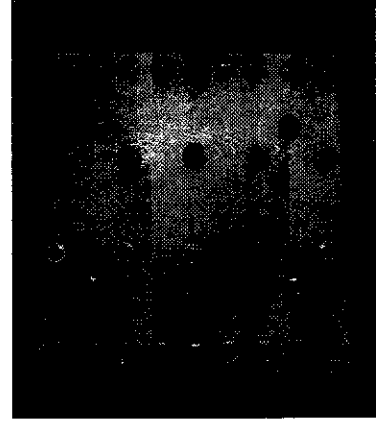
資料 15. チャランガ(インド)



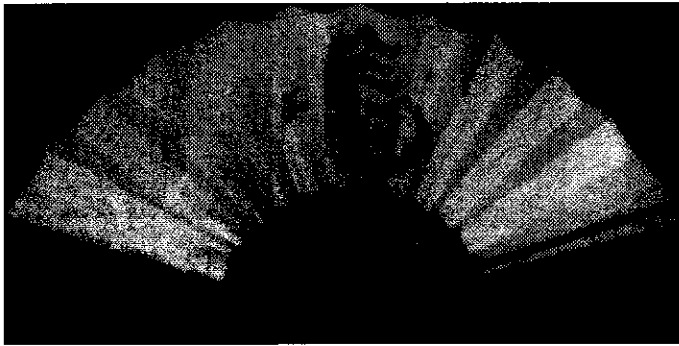
資料 16. マークルック(タイ)



資料 17. チェス(西洋)



資料 18. シャンチー(象棋)




資料 19. 三吉直筆の馬

王将(昭和三十六年)  
作詞: 西條八十 作曲: 船橋和郎  
歌謡: 城田英雄

一、吹けば飛ぶよな 将棋の駒に  
賭けた命を 笑わば笑え  
うまれ浪花の 八百八橋  
月も知てる 俺らの意気地

二、あの手の手の 思案を胸に  
やぶれ長屋で 今年も暮れた  
愚痴も言わずに 女房の小番  
うへへ笑顔が いいじい

三、明口は東京へ 出て行くか  
なにかなでも 勝たねばならぬ  
空に灯がつく 通天閣に  
俺の胸志が また燃える



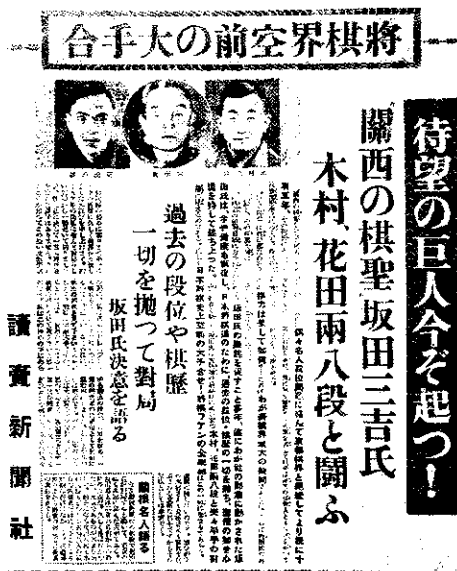
資料 20. 『王将』の歌詞

資料 21. 初代通天閣(1912年)



資料 22. 二代目通天閣(1956年)





資料 23.南禅寺・天龍寺の決戦



資料 24. 通天閣下の王将の碑

映画名	年	配給	監督	主演
『王将』	1948	大映	伊藤大輔	坂東玉三郎
『王将一代』	1955	新東宝	伊藤大輔	辰巳柳太郎
『王将』	1962	東映	伊藤大輔	三國連太郎
『続・王将』	1963	東映	佐藤純弥	三國連太郎
『王将』	1973	東宝	堀川弘通	勝新太郎

資料 25.『王将』の映画化

資料 26. 将棋の 8 大タイトル

タイトル	年	番	賞金	主催
竜王戦	1988	7番	4,400万円	読売新聞
名人戦	1937	7番	非公表	毎日・朝日
王位戦	1960	7番	非公表	ブロック3紙
王座戦	1983	5番	非公表	日経新聞
棋王戦	1975	5番	非公表	共同通信
叡王戦	2018	7番	非公表	不二家
王将戦	1951	7番	非公表	スポニチ・毎日
棋聖戦	1962	5番	非公表	産経新聞

坂田三吉の経歴				
西暦	元号	年齢	出来事	参考
1870	明治3	0	現在の堺市に生まれる	
1872	明治5	2		新橋―横浜間鉄道開通
1877	明治10	7		西南戦争
1881	明治14	11	竹田コユウ、生まれる	明治14年の政変
1891	明治24	21	関根金次郎と初手合いで敗れる	
1896	明治29	26	新聞将棋が初登場する	
1900	明治33	30	小野五平、十二世名人に就位	立憲政友会創設される
1904	明治37	34		日露戦争勃発
1905	明治38	35	この年、コユウ(24)と結婚	ポーツマス条約
1906	明治39	36	長女タマエ誕生	
1907	明治40	37	関根に敗れ大阪まで深夜徒歩で帰る	
1909	明治42	39	長男義雄誕生、「将棋同盟会」東京で結成	伊藤博文、ハルピンで暗殺される
1910	明治43	40	坂田を中心に「将棋研究会」発足	日韓併合
1912	明治45	42	次男春雄誕生	第1次護憲運動起こる、清朝滅亡
1913	大正2	43	関根に平手で初勝利	
1914	大正3	44	コユウ、3人の子を道連れに自殺未遂騒ぎ	第一次世界大戦勃発
1915	大正4	45	小野名人から八段を許される	対華二十一ヶ条の要求
1916	大正5	46	二女フサエ誕生	
1918	大正7	48	関根と最後の対局 関根の勝ち	米騒動、パリ講和会議
1919	大正8	49	三男忠雄誕生	
1921	大正10	51	小野名人没、関根金次郎十三世名人に就位	
1922	大正11	52	眼病を患い対局ほとんどなし、三女美代誕生	
1925	大正14	55	坂田、関西名人を宣言、孤立へ	普通選挙法、治安維持法成立
1927	昭和2	57	妻コユウ病死	
1929	昭和4	59	大阪毎日新聞に『将棋哲学』が掲載される	世界恐慌
1935	昭和10	65	実力名人制に移行	
1937	昭和12	67	南禅寺の対局、天龍寺の対局に敗れる	日中戦争勃発
1938	昭和13	68	翌年にかけて名人挑戦者決定リーグに参加	
1941	昭和16	71		太平洋戦争はじまる
1945	昭和20	75		戦争終結
1946	昭和21	76	坂田三吉、病没(76)	
1955	昭和30		将棋連盟から名人・王将を追贈	